

研究分野のキーワード：地獄絵，六道絵，仏教絵画，他界観，図像学

研究紹介

1 「死んだらどうなるんだろう」と気にする人を気にして

「人は死んだらどうなるのだろうか？」この疑問は、おそらく文明の発生の昔から人々の心を捉えて離さなかったことでしょう。けれども死んだことのない人間にとって、この疑問の正解を見出すことは永遠に不可能だろうと思います。不可能を承知で、それでもこの疑問から目を離すことのできなかつた人々の営みに、ぼくはとても興味があります。

死んだら地獄と極楽がある、という観念は、今でこそ日本の伝統的な他界観（死後世界をめぐるイメージ）です。けれどもよくよく考えればこのイメージをもたらした仏教は、日本にとって外来の宗教だったはずです。仏教が伝来する以前から死後世界に関心を持っていた日本人は、それまで信じてきた他界観から、仏教的な他界観へとあっさり乗り換えてしまったのでしょうか。

2 過去に描かれた死後世界に目を向けて

日本人の他界観の移り変わりを探るために、ぼくは仏教絵画に目を向けます。仏教では、生前の行いの善悪に応じて地獄道・餓鬼道・畜生道・阿修羅道・人道・天道の六つの世界のいずれかに生まれ変わる、いわゆる六道輪廻という考え方が信じられています。この六つの世界（あるいはその中のいずれかの世界）を日本人が描き始めたのは奈良時代頃と考えられています。平安時代には『往生要集』という画期的なハンドブックが登場し、日本人が仏教的な他界観について広く共通認識を持つこともできるようになりました。そして他界観を巡る大規模な絵画作品も、ぼちぼち作られるようになります。

そうした絵画作品、いわゆる地獄絵とか六道絵とか呼ばれる作品には、地獄の責め苦をはじめとした、膨大なモチーフがびっちり描きこまれています。このイメージの一つ一つについて、ぼくはまず検討します。それらは必要が生じるつど、必要に応じて、いつかの時代の誰かによって生み出されたイメージです。さまざまな作品のモチーフの違いや類似を検討すると、人々の価値観の移り変わりが見えてきます。また一方でぼくは、それらモチーフが画面上にどのように並べられるか、画面構成も検討します。この検討からは、日本人がそれまで信じてきた他界観と仏教的な他界観とが交じり合っただけでなく、一体化してゆく様子が見えてきます。

こうした研究の成果については、ぜひウェブ上の「愛教大リポジトリ」にあるぼくの著作物で確認してみてください。高校生の皆さんには

「地獄極楽道中案内（上）」<http://hdl.handle.net/10424/2747>

「地獄極楽道中案内（下）」<http://hdl.handle.net/10424/2746> が読みやすいと思います。